

生き生きした街づくり

い き い き

子安地域住民協議会広報紙

発行

子安地域住民協議会広報部

(公財) 八王子市学園都市文化ふれあい財団

八王子市子安市民センター

八王子市子安町2-6-1

電話 042 (646) 1220

子安市民センターまつりを終えて

子安地域住民協議会

会長 奥野 総一



今年 は 記録 的 な 暑 さ で、東 京 都 で は 最 高 気 温 三 十 五 度 以 上 の 猛 暑 日 が 二 十 二 回、三 十 度 以 上 の 真 夏 日 は 九 十 回 を 観 測 し ま し た。過 去 最 多 で し た。

そ ん な 中、子 安 市 民 セ ン ター ま つ り を、十 月 二 十 八 日、二 十 九 日 と 開 催 し、三 千 五 百 人 の 来 場 者 が あ り ま し た。今 年 も コ ロ ナ 禍 で 活 動 を 休 止 し て い た 団 体 も あ る こ と を 聞 き 及 ん で い ま し た。そ の た め、不 安 が あ り ま し た が、地 域 の 皆 様 の ご 協 力 に よ り 開 催 す る こ と が で き ま し た。

日 本 の 昔 の 祭 り を 遡 っ て み ま す と、各 地 方 都 市 な ど で は、祭 り の た め に 一 年 を 過 ぎ た よ う で す。祭 り の た め に 仕 事 を し、休 暇 を 取 り、み ん な、祭 り に の め り 込 ん だ 歴 史 が あ り ま す。

祭 り の 背 景 と 地 盤 が 違 い ま す が、子 安 住 民 協 会 も、実 行 委 員 会 を 立 ち 上 げ、約 半 年、準 備 を 進 め て 参 り ま し た。ま た、市 民 セ ン ター 周 辺 の 環 境 整 備 を 実 行 委 員 会 の 皆 様 と 春・秋 の 二 回 実 施 し て き ま し た。

二 日 間 で 出 演 団 体 一 十 八 団 体。
出 演 者 数 二 百 六 十 九 名。
来 場 者 数 二 十 八 日 二 千 五 百 名。
二 十 九 日 千 名。
計 三 千 五 百 名。

市 民 セ ン ター ま つ り は、藤 井 保 育 園 の 園 児、い ず み の 森 義 務 教 育 学 校 の 生 徒 の 遊 戯、吹 奏 楽 部 の 演 奏 な ど で 始 ま り、夜 の 民 謡 踊 り の 集 い に は、八 十 八 名 の 参 加 が あ り、優 雅 で、盛 大 な 祭 り と な り ま し た。

展 示 会 場 で は、市 長 デ ザ イン 賞 受 賞 作 を は じ め、二 百 点 以 上 の 秀 美 な 作 品 が 展 示。い ず み の 森 義 務 教 育 学 校 よ り 十 七 枚 の 運 動 会 の 応 援 旗、ク ラ ブ 作 品 な ど、優 れ た 作 品 が 出 展 さ れ ま し た。

催 し は、キ ャ ッ プ コー ナー な ど の こ ど も 向 け イ ベ ン ト、フ リー マー ケ ッ ト、あ ん し ん 相 談 セ ン ター に よ る 健 康 指 導 な ど が 賑 わ い を み せ て い ま し た。さ ら に、キ ャ ッ プ コー ナー を 二 台 誘 致 し、テ ー ブ ル コー ナー を 用 意。憩 い の 場 を 兼 ね、飲 食 し て い た だ き ま し た。そ の 周 辺 の コー ナー に は、福 祉 部 の 方 に 花 壇 を 飾 っ て い た だ き、華 や い だ 雰 囲 気 に な り ま し た。

地 域 の 皆 様 の ご 支 援、ご 協 力 に よ り ま し て、本 年 度 の 子 安 市 民 セ ン ター ま つ り を 開 催 で き ま し た こ と、心 か ら 感 謝 申 し 上 げ ま す。ま た、関 係 諸 団 体 の 皆 様、有 り 難 う ご ざ い ま し た。引 き 続 き、お 力 添 え を い た だ き ま す よ う、よ ろ し く お 願 い 申 し 上 げ ま す。







ご寄稿

八王子市高齢者あんしん相談センター子安

センター長 中村 真理 様

その1…子安市民センターまつりに参加して

コロナ禍によりすっかり祭りから遠のいていた人も、今年こそは祭りに参加して大いに楽しみたいところでしょう。

ごく身近な祭りとして小規模ながら楽しめる市民センターまつりは、住民の住民による住民のための祭りです。様々な出し物、作品展などゆつくりではありますが、住民の活躍の場を後押しする取り組みが復活しつつあるのを感じます。当センターからも「お気軽測定会」と称して、握力や柔軟性、バランスの体力測定と、栄養、認知症、運動の一形態としてノルディックウォークの紹介を清智会記念病院のリハ職の皆様、ノルディックウォークの先生と協力しながら出展させていただきました。心と体は密接に結びついています。健康の秘訣を伺いながら、健康は一日にしてならず、を実感いたしました。

その2…明日は我が身の老い支度

健康は1日にしてならず、と申し上げましたが、老い支度についても

一考。私自身も例外でなく、祖父母の代に比べて兄弟は少なく、親戚同士の集まりも極端に減り、先細り感が否めません。家族や地域で支え合うことは理想ですが、その力が弱まっているのも現実です。親が元気なうちに、と思っても本人から申し出がない限り切り出すことが難しい縁起でもない話。それでも、いつかは誰にでも訪れる「死」。どのように生きたいのか、何を大切にしたいのか、自分で意思を伝えることが難しくなったときに、誰かにゆだねることになるならば、今から周囲の人と話し合っておく必要があるのではありませんか。

さて、私自身はというと、病院に入院して長期療養になったら、管に繋がれたくないな。家族の顔が分かるなら、生きていきたいな。信頼できる医師に出会えるだろうか、看護師

さんは優しくしてくれませんか？…それは自分次第なこともありますね。それより、自分のパソコンやスマホのデータ、持ち物や預金など、断捨離しないとえらいことになっていきます。皆さま、一緒に老い支度講座やアドバンス・ケア・プランニングについて、学びませんか？

